在宅期間課題プリント　解答・解説　　日本史演習Ⅱ

作成者：松村　泰毅

〇はじめに　－　日本史を学ぶ意味

なぜ、過去のことを学ぶ必要があるのか。歴史が苦手な人にとっては常に脳裏に浮かぶ想いですね。その答えは「歴史は繰り返す」という有名な言葉に集約されると私は考えます。なぜならば、私たちの行動は置かれている環境（状況）に左右されるものであり、私たちが住む地球の環境や、私たちが生活をしているなかで起こる良いこと悪いことなどは繰り返されているからです。現在、コロナウィルスが猛威を振るっていますが、かつてもペストやコレラ、インフルエンザなどの菌やウィルスに人類は苦しめられ、克服してきました。現在、世界中で猛威を振るうコロナウィルスは経済危機にもつながっていますが、我々が歴史上よく知っている 1929 年の世界恐慌は、世界中を経済危機に陥れた結果、自国の経済だけが良ければ良い、という身勝手な行動が多くの国で見られ、結果、第２次世界大戦へとつながってしまいました。この大失敗を繰り返さないためには、過去にどのような行動をとったのか我々が知っていなければなりません。私たちの多くは政治の中枢に関わることはありませんが、政治家を自分たちの代表として選ぶのは、主権者である私たちが投票する選挙です。歴史のほとんどは、その時々の政治家たちの成功、失敗の結果です。どのような行動をとる政治家が良いのかを知るためにも歴史を知ることは非常に重要なのです。皆さんの積極的な授業参加を期待します。

プリント：第一次世界大戦について考えよう（２）

前回のふりかえり：（1）日英同盟　（2）中国　（3）青島

背景：（4）アメリカ　（5）ジョン＝ヘイ　　**ワーク１：**日本

解説：背景に書かれている通り、列強はアヘン戦争以来、中国進出（中国の植民地化）を競って行った。列強とは、語句解説にもある通り軍事的・経済的に発展していた国のことであり、現在で言うところの先進国である。日本も列強を目指す以上、中国進出を行う必要があると当時は考えており、日清戦争で台湾、日露戦争で遼東半島の旅順・大連と満州の利権の一部を獲得していた。さらに、第一次世界大戦（以下、WWⅠ（World War Ⅰ）と表記）を利用してドイツ領であった青島へ進出した。一方、かねてから中国進出の機会を狙っていた日露戦争後に日本に満州を共同支配しようと提案していたが、日本はこれを拒否している。よって「第一次世界大戦について考えよう」のプリントで最初に資料集 P280 を見ながら書いてもらった図では日本とアメリカが満州をめぐって対立している、という構図なのだ。この状況からもワーク1の答えが日本であることが読み取れる。

学習（Ａ）：（7）（第２次）大隈重信　（8）寺内正毅　（9）西原借款

学習（Ｂ）：（9）石井菊次郎　（10）ランシング　　＊（9）が2つありました。申し訳ありません。

ワーク２：③or④　　＊作問意図としては③が答えでしたが、④の段祺瑞とすべきところを間違って袁世凱としてしまっているので、④も答えとなります。訂正してお詫びします。

解説：ヨーロッパ列強が WWⅠ で中国を離れている間に、中国支配を進めたい日本は二十一か条の要求を突き付けたが、それによって中国やアメリカと戦争になることは避けたかった。あくまで外交での中国進出を考えていた。そこで、ジョン＝ヘイが声明を出したアメリカの要求を認めるかわりに日本の満州支配も認めてもらう石井・ランシング協定の締結を行った。また、中国の段祺瑞政権に対して西原借款を行ったが、これには中国国内の事情が関係している。当時の中華民国政府は袁世凱の勢力と段祺瑞の勢力が対立していた。どちらの勢力も資金難に陥っていたが、このうち袁世凱の勢力は英・米とのつながりが深く、段祺瑞の勢力は日本とのつながりがあった。そこで日本政府は段祺瑞が政権を握っているときに資金援助をすれば日本の中国進出を円滑に行えると考えたのだ。自分の国が中国の植民地化を進めているのだから、ワーク2の問題では、“植民地支配から脱出の援助”が適切ではないことがわかる。

ワーク３：中国における列強の勢力図を色分けしておくこと。特に、日本が支配した満州・山東省（青島）・台湾を書いてもらったのは 1930 年以降の日本の軍事政策はこの場所を中心に行われるため。

ワーク４：似顔絵を描くことは相手への親近感を生み、人物を覚える上で最適な方法の 1 つです。

プリント：在宅教育期間課題プリント（３）　－　世界初の社会主義国家の誕生

前回の復習：（1）アメリカ　（2）石井・ランシング　（3）寺内正毅　（4）西原借款

学習（A）：（5）ロシア　（6）ソヴィエト　（7）レーニン

解説：ソヴィエトとは「労働者で構成された議会」という意味。つまり、レーニンが作ったソ連という国は王や貴族が存在しない（＝身分による差がない）国であった。ロシア革命を起こしたのはボリシェヴィキとメンシェヴィキという2つの勢力（政治組織）であった。このうちレーニンが率いていたボリシェヴィキが革命後に実権を握り共産党を作っている。

学習Ｂ：（8）シベリア出兵　（9）米騒動

ワークＡ：③

解説：ロシア革命で政権奪取後、WWI から離脱したソ連のレーニンは「平和に関する布告」を発表した。この内容は「秘密外交の禁止」、「無賠償」、「無併合」、「民族自決」の原則に基づく WWI の即時停止であった。実はこの内容は我々が中学校で勉強するアメリカのウィルソン大統領が発表した平和14か条（以下）と非常に似ている。似ている理由はウィルソンがレーニンのものを参考にしたからだ。このうち、「民族自決」とはそれぞれの民族が自分で自分の在り方決めるという意味であり、要は植民地支配されている民族が列強から独立することを意味した。素晴らしい提案なのだが、国土が狭く、資源に乏しいヨーロッパの列強は植民地がなければ経済が成り立たない状態になっていたためにこの提案は受け入れがたいものであった。もし、多くの植民地でレーニンの提案に乗って独立運動が起こると、それは国家の存亡にかかわったのだ。よって、シベリア出兵で干渉しようとした。

＊当時の列強の考え方は「**帝国主義**」である。帝国主義とは**植民地を拡大することで経済を中心とした国家の成長をすることが良いとする考え方**である。前述したとおり、国土が狭く資源の乏しいヨーロッパではなくてはならない考え方であった。当然、同じ境遇である日本も帝国主義によって成長していくことを当然のことと考えた。それが韓国や台湾の併合、中国進出へとつながった。日本が日中戦争・太平洋戦争に突入していった理由を考えるうえで「帝国主義」は重要なキーワードの1つである。ぜひ、理解しておいてほしい。

平和14か条

1. 講和交渉の公開・秘密外交の廃止
2. 海洋(公海)の自由
3. 関税障壁の撤廃(平等な通商関係の樹立)
4. 軍備縮小
5. 植民地の公正な処置
6. ロシアからの撤兵とロシアの政体の自由選択
7. ベルギーの主権回復
8. アルザス=ロレーヌのフランスへの返還
9. イタリア国境の再調整
10. オーストリア=ハンガリー帝国内の民族自治
11. バルカン諸国の独立の保障
12. トルコ支配下の民族の自治の保障
13. ポーランドの独立
14. 国際平和機構の設立